

平成 27 年度 研究成果報告書  
Research Achievement Report FY2015

Date: March 25, 2016

言語社会専攻長

日本語・日本文化専攻長 殿

To Dean of Studies in Language and Society

To Dean of Studies in Japanese Language and Culture

講座名・職名 Course Title・Job Title	ヨーロッパ・アメリカ II 講座 准教授
氏名 Name	菊池 正和
専門分野 Academic Field	イタリア演劇、シチリア文学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	未来派演劇における劇作法と演出
<p>平成 27 年度は、科学研究費補助金・基盤研究 C の研究課題「近現代イタリア演劇における演出の成立過程の研究」の採択 2 年目として、未来派演劇の代表的な劇作家である Filippo Tommaso Marinetti が宣言において次々に表明した演劇理論と、その実践の結果として成立した戯曲作品とを丁寧に関連付けながら綿密な検証を行った。マリネッティ演劇の出発点はフランス象徴主義であり、その過剰に張り巡らされた類推の網や隠喩を多用した劇作法は、終生彼の演劇の基底をなすことになる。その後未来派を創立するが、その運動の中心的トポスとなった「未来派の夕べ」における聴衆との関係性から新しい演劇の在り方を着想する。それは、舞台と客席、演じる側と観客との間の境界を消失させ躍動を生み出すというものであった。当時、大衆の娯楽として流行していたヴァラエティー・ショーにヒントを得て、ついに「総合演劇」の理念を明文化する。その中心概念は「シンテジ」と呼ばれる、短さを本質的要素とした劇的断片であり、わずかな台詞や仕草のうちに無数の状況や感覚を凝集する。それが実践に移された戯曲においては、複数の空間を同時に提示する「浸透」や、人間の心理や感情を物体の生に外在化させた「オブジェドラマ」などの優れて独創的な劇作法に加え、驚愕の惹起や触覚への刺激を提案することで、劇行為の内側に観客を引き入れることに、ある程度までは成功したと言える。</p> <p>その後、総合演劇は革新的な推進力を失い、マリネッティ自身も物語性や論理の展開を含んだ中長編の戯曲へと回帰することになるのであるが、その問題についての踏み込んだ議論が来年度当初の課題である。</p> <p>また、昨年来より予備研究を進めている 1920 年代の未来派演劇についても、Anton Giulio Bragaglia が未来派運動家の拠点として企図した「芸術の家」の設立やそこでの活動実践などについての調査を進めた。</p>	